

解 説



第28回企業交流会パネルディスカッション

強い技術者を生むエコシステム

Powerful Engineer Producerd Ecosystem

上杉一夫*¹, 埴原文雄*², 秋元美由紀*³, 青木規泰*⁴, 矢野 宏*¹,
安藤欣隆*³ (総合司会), 吉原 均*¹ (司会)

フロア

A (大村欣也), B (浜田和孝), C (吉澤正孝), D (常田 聡), E (中島建夫),
F (田村希志臣), G (小池昌義)

文責：編集委員 (澤田 位)

1. エスケー石鹸とNMS研究会

吉原 (司会) 皆さまの手元資料に「NMS会報」がある。これを参考にしながらパネルディスカッションに参加していただければ幸いである。まずはエスケー石鹸の秋元さんに対して、フロアAから、NMS研究会と職場をどのようにつないでいるか、という質問があったので、そこから議論していく。

秋元 NMSに行ったからといって、社内でそれを報告する会合、組織のようなものはない。そういう意味で化学反応と呼べるものはないのではないかと。ただ、安藤も同じだと思うが、行って何かを話してきたり、聴いてきたりしていることが、社内での技術議論の中では、そこで得られた内容が盛り込まれることになる。先ごろ安藤のイニシアティブで社内に技術の専門部署ができた。そこには安藤と秋元がNMSに参加しているのだが、もう一人が先月から参加するようになった。この3人で毎朝技術について議論をする時間を設ける。もしも化学反応のようなものが起きてくるのであれば、それはこれか

らだろう。

フロアA (大村) そこまで達しているということが羨ましい。弊社でもゲリラ的にやることは多々あるがなかなか難しい。御社の活動にこれからも期待してエールを送る。

吉原 ありがとうございます。それではパネルディスカッションのテーマである「強い技術者を生むエコシステム」という点について議論していく。

フロアB (浜田) 今のエコシステムという点で、安藤さんの立ち位置というか、最初はどうかだったのかというあたりを伺いたい。

安藤 秋元の場合はたまたまだ。彼女だけを特に狙っていたわけではなく、種はいろいろな場面でまいていて話はしていたところ彼女が食い下がってきたということだ。常々種はまいていないといけな。基本的には、矢野先生が設定したNMS研究会のプリンシプルと同じで、自分の課題、実践例で考えるということ。自分の課題を課題意識として持っていない人間というのはなかなか食いついてこない。(秋元の場合も) 課題意識を持っていた。「品質工学をやれ」と言ったことは一度もない。課題に対して品質工学の考え方や手法をレベルにあわせて話すということはした。

フロアB (浜田) 今日この会場に来ている御社の社員の方にも聞いてみたい。

*¹ NMS研究会

*² コニカミノルタ(株)

*³ エスケー石鹸(株)

*⁴ (株)松浦機械製作所